
地震災害(1)

(柴山元彦ほか、防災教育マニュアル、東京、創元社、2015、p. 7-21)

2015年7月17日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

地震災害への対策を考える上で、重要な項目に、地震による被害の大きさを知ること、地震を実験的に体験するということがある。地震災害による被害の程度を知ること、必要物資や避難経路などの予測を立てやすくなる。そして、備蓄品が実用的になり、避難生活の長期化にも耐えることが可能になってくる。また、地震を実験的に体験することで、実際の地震の際に、自分がどの程度活動できるのかを体感し、実体験に基づいた避難計画を立てることができるようになる。

・地震は怖い！

日本で発生した大地震である関東大震災、新潟地震、阪神・淡路大震災、東日本大震災、それぞれの規模と被害、二次災害、そして地震後の行政の対応がまとめられている。ここで注目したいのは、どの地震においても新たな被害や現象が起こっている、もしくは新たな法整備がなされている、ということである。関東大震災では市街地建築法の改正による耐震基準の規定がなされ、新潟地震では砂流現象（今日の液状化現象）の言葉の普及、阪神・淡路大震災では建物の倒壊による被害の甚大化、東日本大震災では津波による被害と福島第一原子力発電での原子力事故、といった具合に各地震において特徴があり、また、生活様式の変化に伴って被害の起こり方も変わってくる。そのため、地震に対する避難計画を立てたり、避難生活用品の準備をしたりする際には、自分がどのような生活圏で暮らしており、地震によりライフラインがどのように切断されるのかを考慮した上で計画を立てて行かなければならない。

・地震の実験・体験・見学

地震について実験・体験・見学できる施設や方法がまとめられている。地震のモデル実験器や震源分布を立体的に表現している「震源くん」、液状化実験の方法、地震の資料館や見学・体験施設、そして起震車の説明がなされており、地震を身近なところで体験・認識できる方法が紹介されている。例えば「震源くん」は震源分布がどこにあるのかを把握でき、自分の住んでいる場所が最も近い震源からどの程度離れているのかを知ることが出来る。また地震の資料館や見学・体験施設では実際の地震の揺れや液状化実験を行える場所もあるので、そのような場所を活用し、地震とはどのようなものであるのかを実際に体験することが、地震に遭った時の自分の活動の限界を知ることとなり、確実な避難を考える上での貴重な資料となる。

地震列島である日本では国民の地震に対する意識は未だ低い。国民全体の地震への意識を高めなければ、来るべき大地震での被害が甚大なものになりかねない。それを防ぐためにも、まずは地震を知り、その被害を知り、模擬的に地震を体験することが、意識の向上につながり、被害を少しでも軽減させる手立てになるのではないかと考える。